チロルの挽歌

1992 年に NHK で放映された「チロルの挽歌」の再放送を録画して視聴した。山田太一原作で、写真のように高倉健主演で、大原麗子、杉浦直樹、河原崎長一郎、金子信雄、岡田栄次、佐野浅夫といった名優が出演している。物語は北海道の大地で、高倉健をはじめ 3 人の男女が織りなす、人間模様を描いたものだ。山田大一さんの原作らしい作品である。

私の好きな山田洋次監督も「幸福の黄色いハンカチ」をはじめ北海道の大地を舞台にした作品が多く、高倉健さんもたびたび登場する。大原麗子さんも山田監督の「寅さん」に 2 回登場している。あの時の大原さんの演技が忘れられない。久しぶりに大原さんにお会いできて嬉しかった。

再放送の案内から―過去にそれぞれ関係があった 2 人の男と 1 人の女が北海道で再会した。テーマパーク建設のため過去の三角関係を水に流し、新しい夢に向かって力を合わせるという熱き友情のドラマ。北海道の雄大な四季の中に全て包括されていくような、骨太の人間ドラマである。

人間ドラマだけでなく、北海道の「チロリアンワールド」というテーマパーク建設という舞台設定に注目した。ドラマは架空のテーマパークと自治体であるが、北海道芦別市の「カナディアンワールド」をモデルにしているようだ。このカナディアンワールドについては、現役時代「地域政策論」の講義などで、リゾート開発の具体例として取りあげた。確か NHK の番組映像を使わせてもらって講義した。私の話よりも、「映像はエイぞー」だったと思う。繰り返し映像を見ていたので、「チロルの挽歌」を視聴していて、昔の講義の記憶を呼び覚ました。

芦別市は炭鉱の街だった。石炭産業が斜陽化して、炭坑から観光へと芦別市は舵を切った。炭鉱閉鎖後、地域活性化と雇用創出のために、テーマパーク「カナディアンワールド」を建設した。事業主体は 1988 年に資本金 9000 万円で設立された第三セクター「株式会社 星の降る里芦別」である。小説「赤毛のアン」をモチーフにしたテーマパークであり、1990 年に開業した。ピーク時の 91 年度には約 27 万人の来場者があったが、屋外展示が中心で厳冬期はすぐに客足が遠のいた。第三セクター「星の降る里芦別」は 2007 年に破産し、負債約 34 億円は芦別市が 26 年まで 20 年間にわたって肩代わり返済することになった。第三セクター破たんによる地元負担膨張の構図である。

バブル時代のリゾート開発失敗の事例だが、久しぶりにドラマのなかで「再会」した。

（2021 年 1 月 5 日）